

研究主題

ことばを支える「心の育ち」を
大切にした支援のあり方を考える

研究主題説明資料

2026年度版

北海道言語障害児教育研究協議会

目次

I. 現在の研究の考え方と進め方

P 1 ～12

- 1) 研究主題 P 1
- 2) 研究主題を支える考え方 P 1 ～ 2
- 3) 研究の柱の意図するもの P 3
- 4) 支援を考える思考過程 P 4
- 5) 研究の方法 P 5 ～ 7
- 6) 一資料一子どもをとらえる視点の例 P 8 ～ 1 2 2

II. 研究の歩み

P1 3 ～1 6

- 1) これまでの研究の歩み P 1 3
- 2) 「言語発達に遅れのある子どもの検査法」の研究 P 1 3
- 3) 「教育的診断に基づく指導」の研究 P 1 3 ～ 1 5
- 4) 「わかりあいを大切にした支援のあり方」の研究 P 1 6

I 現在の研究の考え方と進め方

1) 研究主題

2004年度から2014年度までは、担当者と子どものかかわりや、わかり合いを大切に研究を深めてきました。近年、子どもや保護者、担当者、それらを取りまく環境の変化はめざましく、個人の尊重や価値観の多様化がいっそう進みました。

これまでの研究の成果をふまえつつ、ことばの発達の基本的な考え方に立ち返り、これまで道言協が大切にしてきたことを継承させるべく、2015年度から以下のように研究主題を設定しました。

◎研究主題

「ことばを支える『心の育ち』を大切にしたい支援のあり方を考える」

○研究の柱

- | | |
|---|------------|
| 1 その子をどのようにとらえていくか。 | → 子どもの実態把握 |
| 2 その子にとっての問題をどのようにおさえ、問題の発生と経過をどうとらえるか。 | → 子ども理解の仮説 |
| 3 その子にとっての必要な育ちとは何か。どのようにかかわり支援するか。 | → 支援の計画と実際 |
| 4 支援の経過をどのように振り返り、関係する人々とどう情報共有するか。 | → 支援の省察と共有 |

2) 研究主題を支える考え方

○「ことば」とはどういうものかを考えます

ことばはコミュニケーションをする上での道具の一つです。ことばがあるからコミュニケーションができると考えてしまいそうですが、振り返って考えると、生まれてからさまざまな体験やノンバーバルなコミュニケーションを積み重ねる中で、自然に（いつの間にか）身についてくるものが「ことば」です。

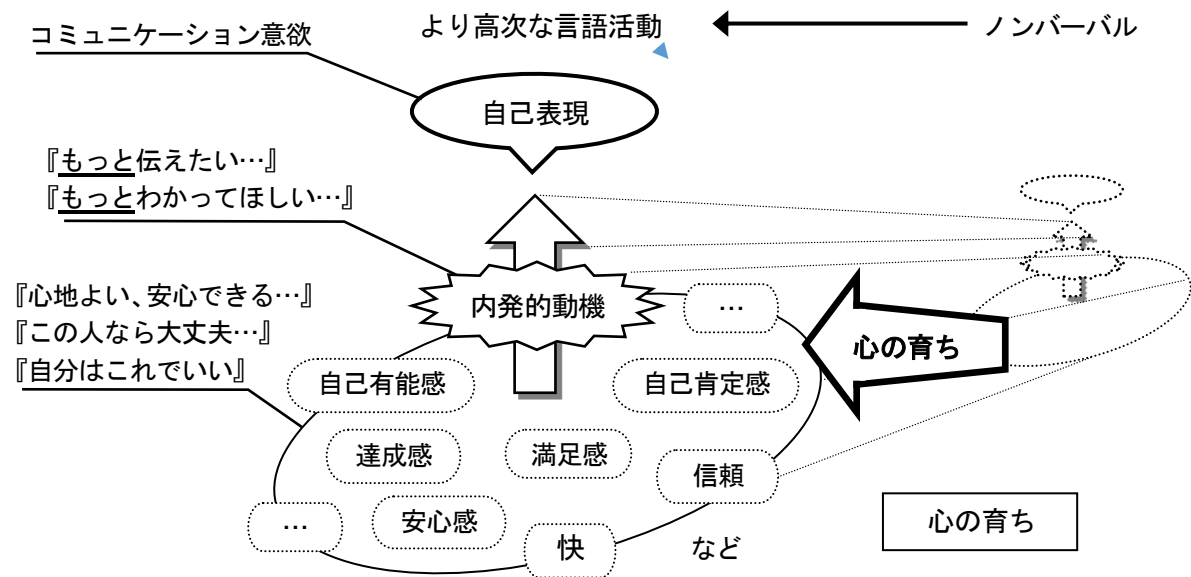
ことばを獲得するために必要な力はさまざまに考えられます。子ども本人の知的な能力、聴力、（口腔機能などを含む）運動能力…など。あるいは人への興味・関心、サインを出す力、人を動かす力などもその一つと言えます。これらの力は生得的であり習得的でもあります。こういった力を土台に、子どもは他者（一般的には母親などの養育者）との確実なコミュニケーション（コミュニケーションの成功体験）を繰り返す中で、絶対的な信頼関係をつくり、人への伝えたい意欲を高め、自分の気持ちや考えを表す「ことば」を獲得するものと考えます。

○「心の育ち」を大切に理由

他者（主に母親などの養育者）との確実なコミュニケーションを行うことで、子どもの中で何が変わっていくのでしょうか。生まれて間もなくの頃は、ぐずって泣くと抱っこされて肌のぬくもりを感じ、快の状態になり安心感を得ます。お腹がすいて泣けば母乳やミルクをもらってお腹いっぱいになり、満足感を味わいます。最初は感覚的なやりとりですが、人に対する絶対的な安心感や信頼感が育まれ、理解が進み表現することが伴ってくると、自らの欲求を満たすために声を出して人を動かし、目的を達成するようになります。

ことばを獲得するまでの間、また成長とともにより高次の言語活動を行っていく子どもの内面では、「快・不快」「安心・不安」「満足・不満足」「信頼・不信」…などの様々な気持ちの動きがある

ようです。自信、自己肯定感、達成感…など、感情や気持ちはより分化し複雑化していきます。このような子どもの内面を総称して「心」と表現し、ことばの発達と密接に結びついているものと考え、研究の中で特に大切にしたい視点の一つとして位置付けていきます。



○「心の育ち」を大切にしたいかかわり（支援）のあり方

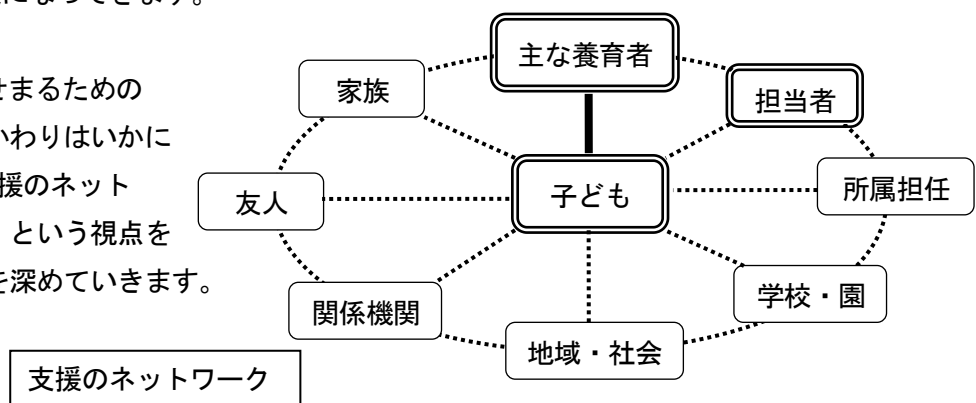
ことばの発達のプロセスを以上のようにとらえると、周囲の人は子どもの「心」に目を向け、理解するよう努め、また「心」がよりよく育つために、どのようなかかわりをする必要があるのかを考えることが重要になります。また、「心」のありようは言語発達だけでなく、その後の対人関係や社会性の習得に大きく影響してくるものと考えます。

子どもがこれまでどのような「育ち」をしてきたのか、発達項目にそって保護者から情報を得るとともに、周りの人との関係や育った環境がどのように影響してきたかを把握することが重要です。

家族構成や家庭環境、保護者の思いや不安、大きなできごと（病気や引っ越しなど）などが影響する場合もあり、保護者とよく話し合っていくことが大切です。

「今、どのような支援（手立て・かかわり）をするか？」を考えるときに、生得的であり習得的でもある様々な力がことばの発達に及ぼす影響の大きさを考えると、丁寧に生育歴をとることは、欠かせない重要な作業になってきます。

「心の育ち」にせまるための担当者としてのかかわりはいかにあるべきかを、「支援のネットワークの中の一人」という視点を持ちながら、研究を深めていきます。



3) 研究の柱の意図するもの

○研究主題と主題を支える考え方を基に、4つの研究の柱を立てました。以下にその意図を示します。

柱1 その子をどのようにとらえていくか。

柱1は「子どもの実態把握」です。「その子どものどこをどのように観て、とらえていくのか」「その子どもを担当者はどんな姿勢でとらえていくのか」ということを考えます。

支援を考える思考過程は、「ことば」や「聞こえ」のことをきっかけに相談に訪れた保護者と子どもに対して、相談内容の確認を含め、現在のことばや聞こえの状態（言語症状・聞こえにくさなど）を把握するところから始まります。さらに「ことば」「聞こえ」という側面だけでなく、道言協が「言語発達に遅れのある子どもの検査法」の研究から長年にわたり継承してきている多面的な視点を生かし、総合的に子どもを観ていきます。よりよい支援を考えるために、子どもの「心」に目を向け、子どもの姿をとらえていきます。

柱2 その子にとっての問題をどのようにおさえ、問題の発生と経過をどうとらえるか。

柱2は「子ども理解の仮説」です。これまでも「教育的診断に基づく指導」の研究や「わかり合いを大切にした指導のあり方」の研究を通して、その子どもの困っていることや保護者の心配が「どのように発生したか」の筋道を考えてきました。実態把握で得た情報を基に、コミュニケーションにおける困難さや、他者との関係や困り具合、不安や心配なども見取っていきます。「その子どもの問題」ではなく、その子どもの発達段階や性格、周囲の人たちのかかわりなどによって変わってくる「その子どもにとっての問題」を明らかにします。さらに、その子が「どのような人とのかかわりの中で育ってきたのか」を中心に保護者とともに育ちを振り返る中で、現在の状態に至る要因を探り、仮説を立てながら理解を深めていきます。

柱3 その子にとっての必要な育ちとは何か。どのようにかかわり支援するか。

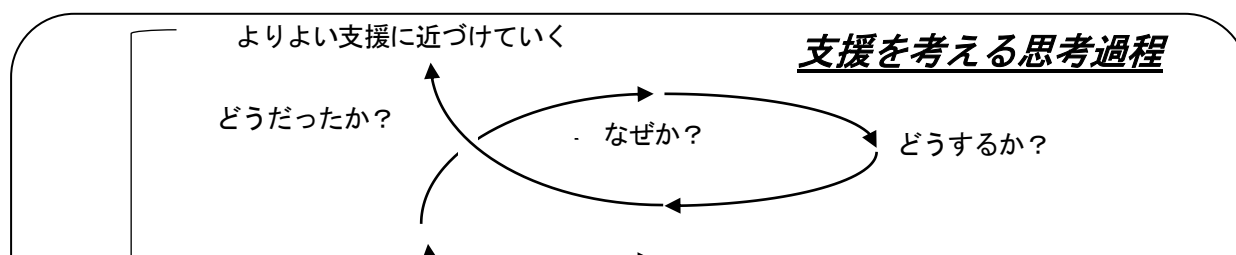
柱3は、子どもに対する「支援の計画と実際」です。「支援」ということばは「指導」を含んだ広い意味で使用しています。これまでにとらえた「その子どもの姿」「その子どもにとっての問題」とその子どもの「育ち」、その中の「問題が発生してきた背景」の理解を基に、どう子どもと保護者を支え、これからの育ちを支援していくかを考えていきます。また、常にかかわりを振り返り、「今、その子どもにはこの部分の支援が必要」と考えられることを行っていきます。子どもの育ちの理解が進めば、支援すべき事柄がはっきりしてきますし、育ちが変化すれば（成長すれば）、支援すべき事柄も変化します。担当者とのかかわり合いによりその子どもがどう反応し変化したのか（または変化しなかったのか）も観てとらえながら、その後の支援に生かしていきます。

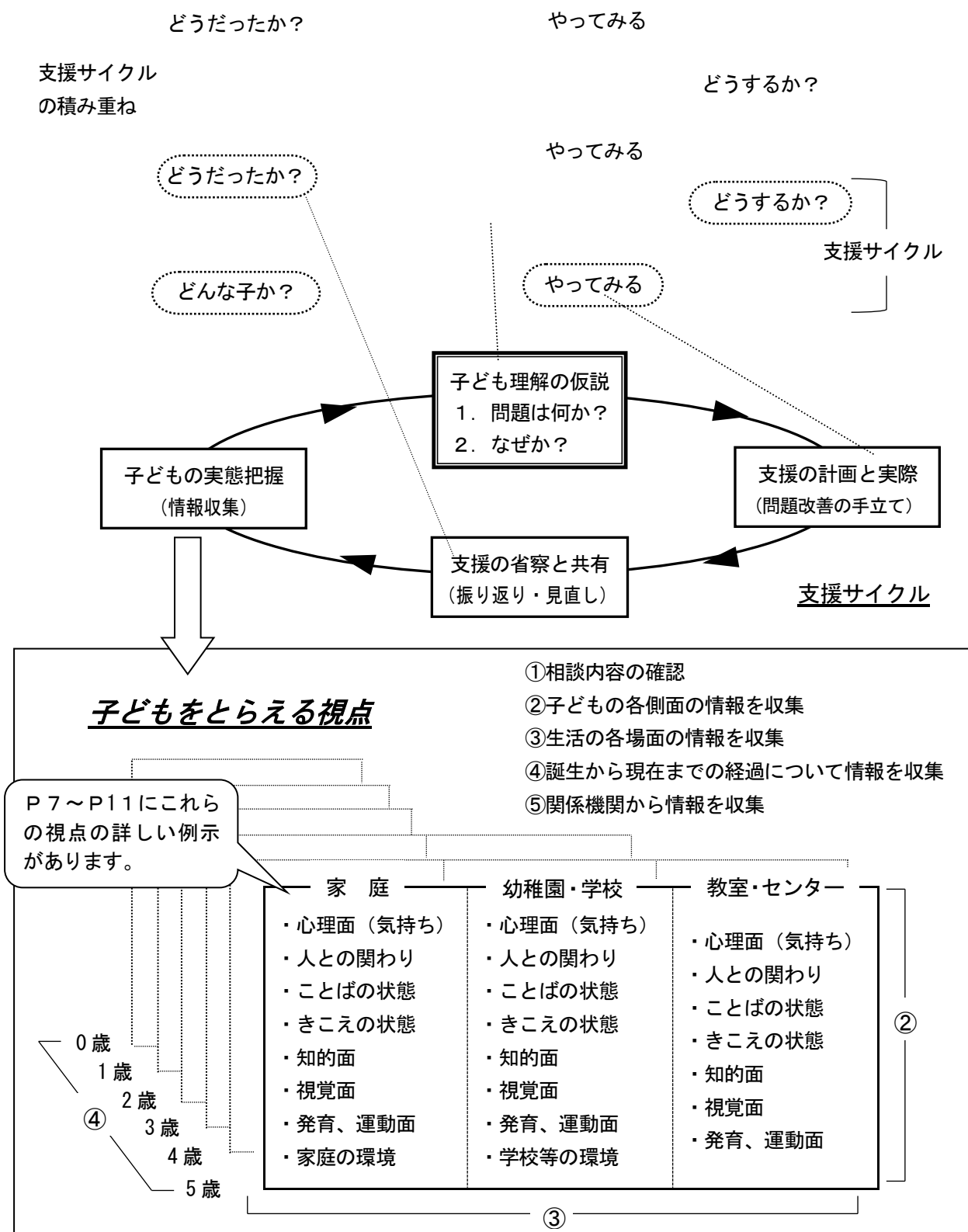
柱4 支援の経過をどのように振り返り、関係する人々とどう情報共有するか。

柱4は「支援の省察と共有」です。「省察」とは、これまでの研究の中でも常に根底にあった「振り返り」「見直し」を、改めて意識づけしたものです。

事例を中心とした研究を進めていくためには、担当者が指導過程での自分の実践の考えや思いを丁寧に振り返り、それが会員同士で共有され、さらに担当者として「こう考える」という視点を深められることが必要です。そのためには、担当者がどのようにかかわったのか、それに対する子どもの反応はどうか、その反応をどう読み取ったか、それをどのように子どもに返したのか…といった一連のプロセスを振り返り、省みる必要があります。このために、個人の記録で、周りの担当者との交流で、教室研修やブロック研修で、大会発表でと、様々な機会を利用して省察し周囲と共有し、「ことばを支える『心の育ち』」の共通理解を深めながら、検討を重ね研究を進めていきたいと考えます。

4) 支援を考える思考過程





5) 研究の方法

◎P4の「支援を考える思考過程」を基にして事例検討形式を進めます。

- ・事例研究のレポートの作成にあたっては、研究主題の意図を意識して、まとめてください。
- ・下記のレポートの項立てを参考に、それぞれの発表内容や検討したい内容に即して、発表しやすいようにまとめてください。

＜事例検討レポートの項立て例＞

1. はじめに

- ・担当者との出会いや通級の経緯、子どもの概要を記載します。

2. 子どもの実態

- ・P8～P11を参考にして子どもの基礎情報（生育歴や初回相談での様子など）を記載します。
 - * 個人情報保護の観点から、個人が特定されないような配慮をお願いします。
 - * 心理検査の数値は記述しないでください。
- ・研究の柱1（子どもの実態把握）にあたります。

3. 子ども理解の仮説

- ・P4、P11、P12を参考にして子ども理解の仮説をたてます。
- ・研究の柱2（子ども理解の仮説）にあたります。
- ・子ども理解の仮説には、問題仮説と要因仮説を含みます。

4. 支援の計画

- ・P12を参考にして支援の仮説をたてます。
- ・研究の柱3（支援の計画）にあたります。

5. 支援の経過

第Ⅰ期

- 1) 支援の目標・支援の内容
- 2) 支援の経過・子どもの変容
- 3) 支援の省察

第Ⅱ期

- 1) 支援の目標・支援の内容
- 2) 支援の経過・子どもの変容
- 3) 支援の省察

・
・
・

- ・研究の柱3（支援の実際）と研究の柱4（支援の省察）にあたります。
- ・支援を見直すまでの一区切りを一期としてまとめていきます。
- ・支援から現在までが短い場合は、6. おわりに の中で、研究の柱4（支援の省察と共有）について述べます。

6. おわりに

- ・研究の柱4（支援の省察と共有）にあたります。
- ・研究主題や協議の柱を念頭において、どのような視点で意見交流をしたいか、担当者の思いをまとめます。

＜全道大会分科会発表レポート作成と注意事項＞

○発表レポート（大会発表集録原稿）の完成まで

① 分科会を発表種別を選択する

（事前調査1回目→前年度12～1月頃レポート提出者名報告1月中〳切 2回目調査→当年度4月〳切）

- ・発表主題、発表要旨、発表種別、コーディネーターの希望を理事へ報告します。
- ・発表主題は、どのような子の発表なのかがわかるように指定文字数以内で書き表します。発表原稿の標題と同じ内容になるように心がけます。
- ・発表要旨は、どんな子か、どんなことを話し合いたいがわかるように要約をして書き表します。
- ・分科会には3つの発表種別があり、研究主題に基づく事例検討をする「事例研究分科会」、教室運営上の諸問題を検討する「教室運営分科会」、様々な実践を交流する「実践報告分科会」の3種類が設置されます。レポート提供者は、3つの中から、発表内容に合う分科会を選び理事へ報告します。理事から、レポート提供者氏名報告時にあわせて大会係へ報告されます。
- ・「分科会種別」と「発表内容（標題）」、その後報告される「発表要旨」がHP上に掲載され、参加者はそれらを参考に分科会を選択することになります。レポート提供者の意図が伝わるよう、わかりやすい報告をお願いいたします。

② レポートを作成する

- ・事例研究は研究主題を念頭においてまとめていきます。
- ・個人情報保護の観点から、レポートとして使用させていただく旨の同意書を保護者からいただくことを推奨します。
- ・項立ては、研究主題の説明資料 P5 を参照してください。
- ・記載については広報部集録係より提案される「発表集録・執筆要項（例）」を参考にしてください。今までは、学校名などを記載していただきましたが、個人情報保護の観点から今後レポート提供者の情報は記載しないこととします。
- ・レポート内容の検討にあたっては、教室やブロックの先生方とよく相談してまとめてください。また、大会係に事前に相談されることをお勧めします。
- ・当日資料を作成する場合、あくまで補助的なものと考え、発表レポートで発表の概要が分かるようにまとめてください。

※ レポートの標題を事前調査時と変更する場合は、早めに大会係へご連絡ください。

③ 協議の柱（案）を立てる

- ・分科会協力員やコーディネーターの先生とで相談して決めます。その際に、どのような分科会にしたいか、お互いに意見を出し合って調整することをお勧めします。

④ 研究発表（レポート）の完成

- ・完成した原稿を集録係へ送ります。
- ・発表集録として編集され、会員へ事前に送られます。

※名称変更されました。

- ・分科会協力員（運営協力員）
- ・協議の柱（討議の柱）
- ・レポート提供者（発表者）

○事前の準備

- ・レポート提供者は、発表（しゃべり）の原稿を必ず用意してください。限られた時間内で、要点を押さえて説明するためには、原稿が必要です。原稿を作ることが、考えをまとめるのにも役立ちますし、その際、パワーポイント等を使用しても構いません。
- ・参加者は、事前に発表レポートをよく読み、質問や意見をまとめて、メモをして参加してください。

○発表に関する資料について

- ・当日資料がある場合は、分科会協力員に連絡し、参加人数よりも10部多めに印刷し当日持参してください。分科会の参加人数は、大会係からレポート提供者にお知らせします。回収をする場合にはあらかじめナンバリングしておくことをお勧めします。
- ・必須ではありませんが、映像（音声を含む）子どもの書いた絵や作文があると、子どもを理解するためのよい手がかりになります。映像は編集するなどして、スムーズな運営にご協力ください。

○分科会での発表

- ・発表時間は、映像の視聴を含めて、発表が1本の分科会では25分、発表が2本の分科会では20分となっていますので、時間を厳守してください。
- ・参加者はレポートを事前に読んでくることになっています。レポート提供者は、レポートを読むだけでなく、レポートの中で特に伝えたいことや、書けなかったこと、参加者に聞きたいことなどを簡潔に説明してください。

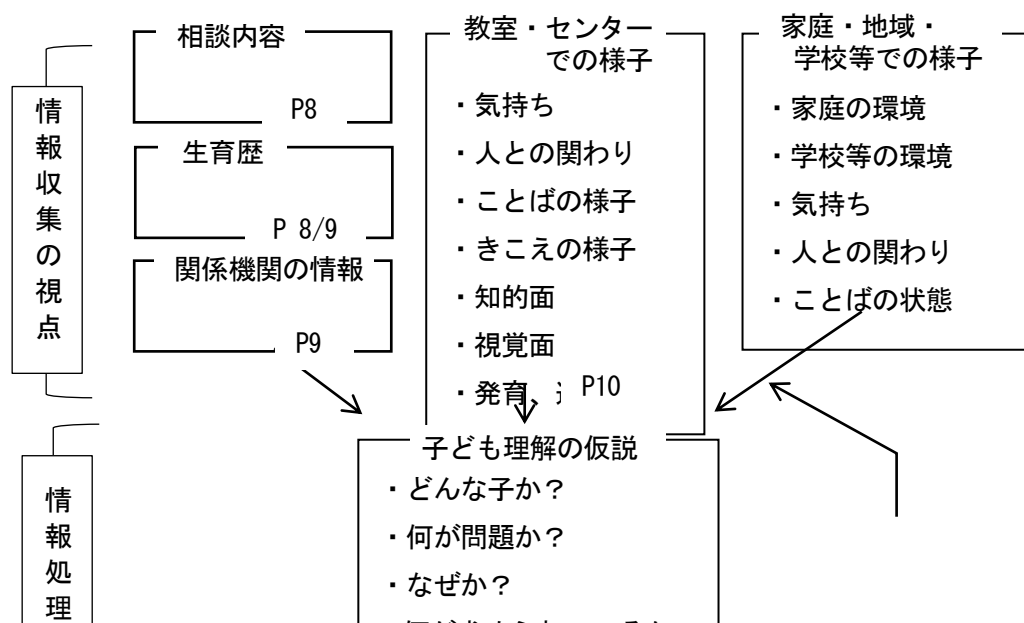
○参加者による質問

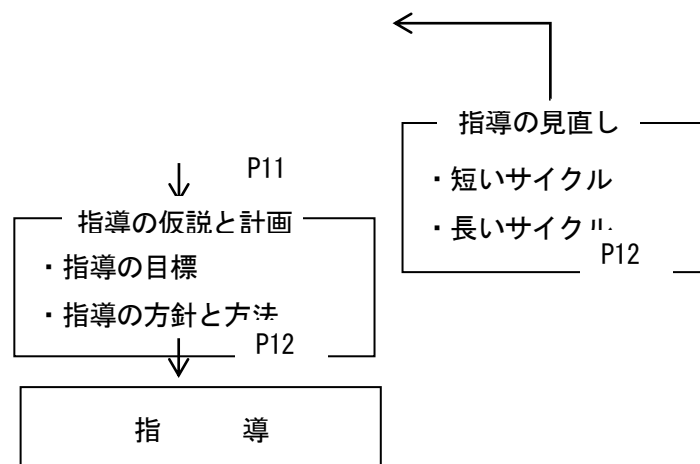
- ・どのような視点で質問をするかが重要です。話し合いが深まるような質問と応答があることによって、事例について参加者の共通理解が得られたり活発な研究協議につながったりします。質問をすることは、質問者の「視点」を示すことになりますので、質問をし合うことによって「視点」の勉強をし合うことになります。

○研究協議

- ・「協議の柱（案）」を基にして協議の進め方を話し合い、「協議の柱」を決定します。取り上げてほしい話題があれば、この時点で意見として出しておきます。
- ・協議は、決められた「協議の柱」にしたがって進めます。その際、レポート提供者とレポートを大切に協議の進め方に心がけます。
- ・研究協議を参加者全員で作り上げていくという共通意識で、多くの参加者からの発言を期待します。
- ・発言に当たっては、要点をメモしてから発言するなど、簡潔でわかりやすい発言に心がけます。

6) ー資料ー 子どもをとらえる視点の例





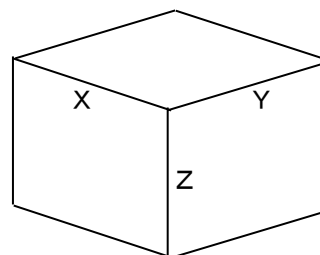
以下は、以前の研究主題（教育的診断に基づく指導はどうあるべきか）による研究で培ってきた、子どもをとらえる視点の例です。教室や地域で行った研修や交流から得た情報を追加しながら、研究を深めていきましょう。

相談内容（主訴）	生 育 歴
〔相談内容の確認〕 ・ことばやきこえの問題で困っていることは？ ・ことばやきこえ以外の問題で困っていることは？ ・何が不安、心配なのか？ ・知りたい情報は何か？ ・ことばの教室に、何を望んでいるか？ ・ 〔問題の気付き〕 ・この問題について、いつごろ、誰が気がついたか？ ・この問題について、これまで心掛けてきたことは？ その効果は？ ・この問題について、これまで誰と相談してきたか？	〔妊娠中・出産時〕 ・妊娠中の様子は？母親の体調、病気、仕事、特記事項？ ・母親の年齢？産院は？予定日より早い？遅い？何日ぐらい？ ・出産時の異常（逆子、帝王切開、鉗子分娩、吸引分娩、ますい分娩、すぐ泣かないなど） ・生下時体重？黄だん？ ・ ・
生 育 歴	

〔乳児期〕 ・ 生後 12 か月ぐらいまでの様子は？ 手のかかる子だったか？ ・ 授乳・離乳は？（母乳かミルクか？離乳の時期？） ・ 健康状態は？ ・ 〔発育〕 ・ 身体発達は？首のすわり、はいはい、おすわり、つたい歩き、初歩、歯がはえる時期は？ ・ 排尿は？おしっこを教えた、おしめが完全にいらなくなった時は？ ・ 発語器官は？かむ、吸う、吹く、なめる、飲みこむ、うがいなどが上手にできるか？ ・ 〔関係行動の発達〕 ・ 甘え泣き、抱きぐせ、そい寝の習慣の有無と時期、様子は？ ・ あと追い、人みしり、指しゃぶりの有無と時期、様子は？ ・ 芸ごと（イナイナイバアなど）の有無と時期、様子は？ ・ 指さしの有無と時期、様子は？ ・ 人を求める様子、警戒する様子は？ ・ 〔ことばときこえの発達〕 ・ 喃語、一語文、二語文の時期は？ どんなことば？ ・ 聞こえにくさを疑った時期があったか？ 中耳炎等の耳の病気は？ ・ 簡単なことばの理解は？（オメメは？オクチは？など） ・ 簡単な指示の理解は？（こっちにおいて、新聞とってきてなど） ・ 〔知的発達・性格・行動特徴〕 ・ 知的な発達の遅れを疑ったことがあるか？ どんなことで？ ・ 性格や行動で特徴的なことは？ ・ ・	〔これまで子どもを取り巻いてきた環境〕 ・ 一緒に住んでいる人は誰だれか？ ・ その人達の関係や年齢は？ ・ 本児が生まれた時の兄弟の年齢は？ どんな兄弟か？ ・ 本児が何歳の時に弟妹が生まれたか？ どんな弟妹か？ ・ 家族・親戚に障害のある人がいるか？ ・ 〔相談歴・教育歴〕 ・ これまで行った相談機関は？ いつ？ その結果は？ ・ これまで通った保育園・幼稚園・施設等は？ いつ？そこでの様子は？ ・ 担任の先生が本児にとっての問題や性格についてどのように話しているか？ ・ 〔病歴・検査歴・通院歴〕 ・ 発熱やひきつけがあったか？ いつ？ その結果は？ ・ これまでかかった主な病気は？ いつ？ その結果は？ ・ どの病院へ行って、どのような検査や治療を受けたか？ いつ？ その結果は？ ・ 〔その他〕 ・ 大きな出来事、エピソード、 ・ 親がどのような思いで子どもを育ててきたか？ ・ ・
	関係機関からの情報 ・ 紹介者からの情報 ・ 他の機関へ検査等を依頼する必要があるか？ ・ 他の相談機関からの検査結果・所見 ・ 医療機関からの検査結果・医学的所見 ・ ・
教室・センターでの様子	

〔気持ち・思い〕（心理面） ・怖いこと、心配なこと、いやなことは？ ・こだわること、ゆるせないことは？ ・イライラする時は？ 落ちついている時は？ ・安心できるとき、ところ、人は？ ・興味・関心のあることは？ ・喜ぶこと、うれしいこと、楽しいことは？ ・聞いてほしいこと、訴えたいことは？ ・得意なこと、認めてほしいことは？ ・それらをどんな表現の仕方（サインの出し方）をするか？ ・自分自身をどのように評価しているか？ ・ 〔人との関わりの様子〕（関係の発達） ・こちらから関わらなければどうしているか？ ・子どもからどんな関わり方をしてくるか？ ・こちらから関わったらどう反応するか？ こちらをどのように見ているか？ ・物をつかってどのように遊ぶか？ 何かに見立てて遊ぶか？ ・人とどのように向き合うか？ 視線が合うか？ 人真似をするか？ ・人とどのように遊ぶか？ 勝ち負けのあるゲームは？ ごっこ遊びは？ ・父親・母親との関わりはどうか？ ・どんな要求の仕方をするか？ 何かほしい時は？ 痛い目にあった時は？ ・どんな拒否の仕方をするか？ ・人を動かす力は？ 親を手こずらせることは？ ・感情の表現は？ 表情は？ 声は？ 動作は？ ・共感的な関わりは？ ・特異な行動は？ 爪かみ チック 奇声 多動 特定の物に執着 ・ 〔ことばの様子〕（言語面） ・声の大きさや質、ピッチ、緊張は？ ・構音の状態は？置き換え、省略、歪みは？ ・口唇、顎、舌の動きは？ ・話し方の明瞭さ、流暢さ、速さは？ ・弁別力は？ ・記銘力は？ ・理解力は？ ・発話量、語文長、語い力、構文力は？ ・会話の中でのことばの使い方は？ ・	〔きこえの様子〕（聴覚面） ・様々な環境音に対する興味、反応は？ ・呼び掛けに対する反応は？ 振り向く 無視する ・話しかけたときの様子は？ 聞き返す 片方の耳をこちらに向ける ・オミミハ？オメメハ？と聞いたらどうか？ ・ラジオ、テレビの音量をどうするか？ ・音楽のリズムに合わせるか？ ・声の質は？ こもった声になっていないか？ ・騒がしいところでも話が通じるか？ ・ ・ 〔知的面〕 ・玩具や道具の操作のし方は？操作の模倣は？ ・どのような絵を描くか？ ・指さし行動、提示行動、つもり行動は？ ・象徴機能の発達は？ ・ことばや歌の模倣は？ ・数の順唱・逆唱は？ ・ ・ 〔視覚面〕 ・物を見る時の様子は？ ・歩き方は？ つかみ方は？ ・図形や記号、色の識別は？ ・動く物をつかんだり、逃げたりできるか？ ・ ・ 〔発育・運動面〕 ・全身の発育の状態は？ ・アレルギーやストレス性の持病等は？ ・全身運動－歩行、ボール投げ、スキップ、バランスは？ ・手の運動－スプーン、はし、はさみの使い方は？ ・口腔の運動機能 －吹く、吸う、かむ、なめる・・・？ ・ ・
家庭での様子	子ども理解の仮説

〔家庭の環境〕 ・ 家族構成は？ ・ 家族の人間関係は？ ・ 親のパーソナリティーは？ こだわりは？ ・ 親の価値観、教育観は？・ 親の養育態度は？ ・ 家族はその子をどう見ているか？ ・ 家の周囲の環境は？ ・ ・ ・ 〔気持ち・思い〕（心理面） → P 10参照 〔人との関わりの様子〕（関係の発達） → P 10参照 〔ことばの様子〕（言語面） → P 10参照	〔どんな子か？〕（子どもの理解） ・ 全体をとおしてどんな子か？ ・ どのような育ち方をしてきた子か？ ・ 人との関係がどのように発達してきたか？ ・ 場面、環境でどのように様子に変化するのか？ ・ その子らしさ（個性）はどんなところにあるか？ ・ どんな時に、生き生きしているか？ ・ 好きなこと、得意なことは？ ・ その子を取り囲んでいる人々はどんな人達か？ 〔その子にとっての問題は何か？〕 ・ ことばやきこえの「症状」はどうか？ ・ まわりの人々は子どもをどう見ているか？どう理解しているか？ ・ 子どもはまわりの人々をどう見ているのか？ ・ 子どもとまわりの人々との関係は？ ・ 親が困っていることは？ 不安は？ ・ 担任が困っていることは？ 不安は？ ・ 子どもが困っていることは？ 不安は？ ・ 総合的に見て、その子にとっての「問題」をどのようにおさえるか ・ 「問題の箱」の考え方で見たら問題の大きさは？ 問題の大きさ＝$X \times Y \times Z$ X－症状の程度（吃症状等） Y－Xに対する回りの人の意識 Z－XやYに対する本人の意識
学校等での様子 〔学校等の環境〕 ・ まわり子どもたちの様子は？ ・ まわりの子はその子をどう見ているか？ ・ 担任の教育方針は？ ・ 担任はその子をどう見ているか？ ・ ・ ・ 〔気持ち・思い〕（心理面） → P 10参照 〔人との関わりの様子〕（関係の発達） → P 10参照 〔ことばの様子〕（言語面） → P 10参照	〔なぜ、そのようになってきたか？〕 ・ その子らしい本来の育ちがうまく行かなかったのはなぜか？ ・ その親らしい本来の子育てがうまく行かなかったのはなぜか？ ・ その家族の関係がうまく育たなかったのはなぜか？ ・ 生育歴上の要因は？ ・ 身体的、医学的な要因は？ ・ 環境的な要因は？ ・ 不安、心配のもととは？



〔何が求められているか？〕 ・親は何を求めているのか？ 何を知りたいのか？ ・担任は何を求めているのか？ 何を知りたいのか？ ・子どもは何を求めているのか？ 何を知りたいのか？ ・ ・	指導の見直し 〔短いサイクルの見直し〕 ＜子どもの様子の変化＞ ・気持ち・思いは？ →P10 ・人との関わりの様子は？ →P10 ・ことばの様子は？ →P10 ・知的面は？ →P10 ・聴覚面は？ →P10 ・視覚面は？ →P10 ・発育・運動面は？ →P10 ・親子の関わりの様子は？ ・親の子どもを見る見方は？ ・ ・ ・
指導の仮説と計画	
〔指導の目標〕（ねらい） ・求められていることに対して、どこまでを教室の役割とおさえるか？ ・教室としては何ができるのか？ ・ことばやきこえの症状を軽減するために何を援助するか？ ・その子らしい生き方ができるように何を援助するか？ ・子どもとまわりの人々が共に暮らしやすくなるために何を援助するか？ ・ ・ ・ 〔指導方針と指導方法〕 ・困ること、不安なことを減らしていくにはどうすればよいか？ ・喜ぶこと、いきいきすることを増やすにはどうすればよいか？ ・相互の関係を促していくにはどうすればよいか？ ・興味関心のあることで、目標達成に利用できることは何か？ ・親を安心させ、自信をもたせていくにはどうすればよいか？ ・どのような場面を用意するか？ ・どのような教材を用意するか？ ・どのように環境に働きかけるか？ ・親子のよりよい関わりの場をどう用意するか？ ・家族のよりよい関わりの場をどう用意するか？ ・まわりの人々とのどのように連携・協働して援助するか。 ・ ・ ・	＜指導者のかかわり＞ ・指導のねらいはよかったか？ ・場面・教材の準備はよかったか？ ・子どもへのかかわり方はよかったか？ ・子どもの変化や要求に応じることができたか？ ・子どもと指導者の相互の関係はどうだったか？ ・指導者の気持ち・体調はどうだったか？ ・ ・ ・ 〔長いサイクルの見直し〕 ・相談内容について変化はあったか？→P8 ・生育歴で新たなことが分かったか？→P8/9 ・関係機関からの情報で新たなことが分かったか？→P9 ・ことばの教室での様子に大きな変化があったか？→P10 ・家庭・地域・学校等の様子に大きな変化があったか？→P11 ・子ども理解の仮説は適切だったか？→P11 ・指導の仮説と計画は適切だったか？→P12 ・ ・ ・

Ⅱ 研究の歩み

1) これまでの研究の歩み

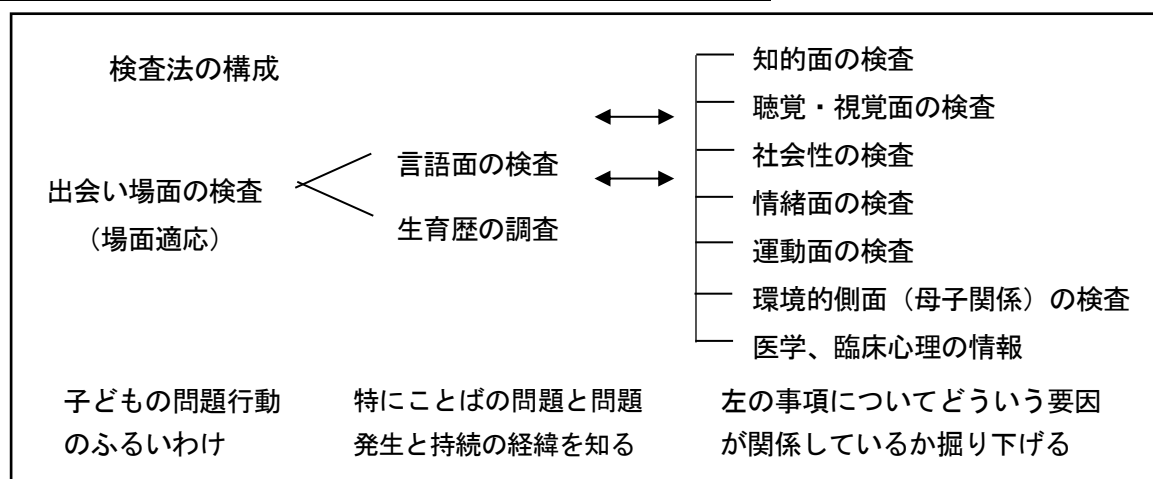
この資料は道言協の2015年度からの研究主題を説明するための資料です。この研究主題は、これまでの道言協の研究の成果を土台としていますので、これまでの研究の歴史を簡単にまとめていきます。

道言協は、1968年に発足しました。まず初めに取り組んだのが、「言語発達の遅れた子どもの検査法」を作成する共同研究でした。当時は、構音障害や口蓋裂、吃音等についての解説書はあったものの、言語発達の遅れに対する解説書がなく、それらの子どもたちを理解するための共通の視点をもちたいとの意図で「検査法」作りを始めました。

はじめに指導方法を考えるのではなく、子どもの実態を理解した上で指導方法を考えようとした。この、子どもの実態を理解しようとする姿勢が、道言協の研究の原点と言えます。

また、下の「検査法の構成」にあるように、子どもを、多面的かつ総合的に理解しようとした。当時としては、画期的な発想だったと言えます。今後もこれらの基本姿勢を大切にしていきます。

2) 「言語発達に遅れのある子どもの検査法」の研究 1970年～



3) 「教育的診断に基づく指導」の研究 1987年～

この後、対象を言語発達の遅れに限定せず、様々な子どもの指導を考えるときに必要な「子どもをとらえる視点」と「指導を考える思考過程」を追及する研究を目指しました。研究主題として「教育的診断に基づく指導はどうあるべきか」との大テーマを掲げて、研究が進められました。

「指導を考える思考過程」としては「情報の収集」「問題の仮説」「指導の仮説と計画」「指導」「指導の見直し」のサイクルを繰り返すことによって、よりよい指導に近づくことを目指してきました。

以下、「教育的診断に基づく指導」に関する考え方を掲載いたします。

<「教育的診断に基づく指導」に関する考え方>

☆「教育的診断」は診断名をつけることではない

「教育的診断」は“診断名をつけること”ではなく、子どもを見て指導を考え、指導をしながら子どもを見て次の指導を考えていく総合的な思考過程であると考えます。

☆「教育的診断」にはいくつかの思考過程がある

○ どんな子か？ —— 「情報の収集」

相談内容の確認や生育歴調査、行動観察、諸検査などの方法で子どもをあらゆる視点から総合的に見ます。

○ なぜか？ —— 「問題発生要因の仮説」

次にそれらの情報を基に、「もしかするとこのようなわけがあったのではないだろうか」といった推測をします。

○ どうするか？ —— 「指導の仮説と計画」

そして、問題発生要因の仮説に基づいて「とりあえずこのような方針でやるのがよいのではないか」（指導の仮説）と決め、その具体的な手立てを考えます。そのときに、おおよその見通しを立てます。（指導の計画）

○ やってみる —— 「指 導」

○ どうだったか？ —— 「指導の見直し」

指導者のかかわりや子どもの反応、変化を見て、仮説や計画を見直します。

☆「教育的診断」は繰り返し行われる

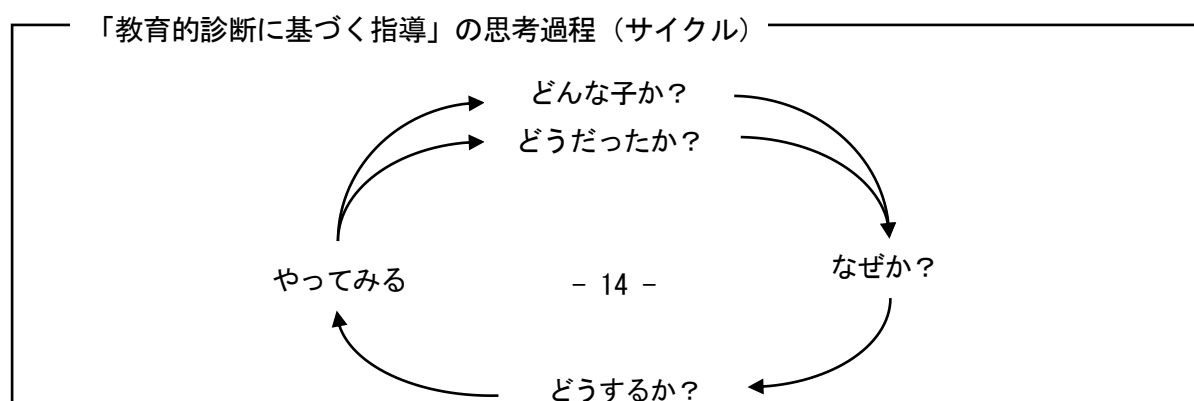
上に述べたような過程が繰り返し行われ、より適切な指導へと近づいていくものと考えます。「教育的診断」は指導を進める上でのフィードバック回路であるとも言えます。

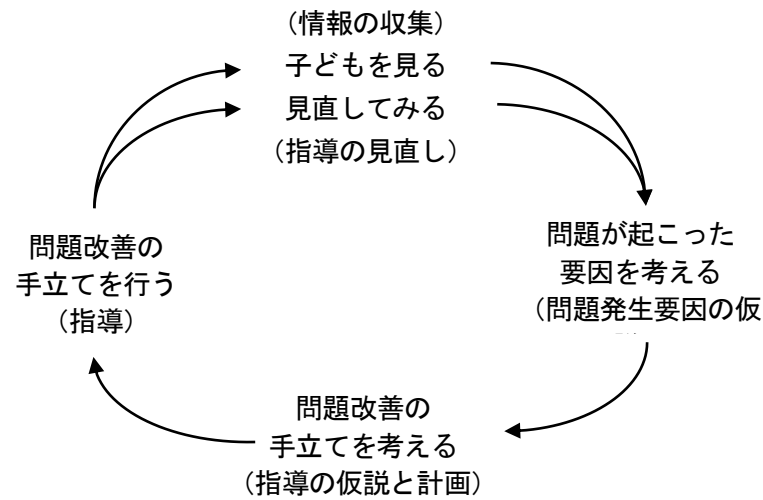
☆「教育的診断」には長いサイクル、短いサイクルがある

そのフィードバックをするサイクル（周期）は、長くは学期ごとのケース会議における見直しであり、日常的には、指導後に記録を書くときの見直しであり、短くは指導時間内の子どもの様子や変化を見た上での見直しであるわけで、長短さまざまな周期で、大きな見直し小さな見直しをしていくことになると思います。

☆診断と指導は一連・一体の過程である

実際には診断しなければ指導ができませんし、指導しなければ診断もできないのですから、診断と指導は一連のもの、あるいは一体のものと言えます。診断と指導は交互に繰り返し、あるいは同時に進行しながら、相互に助け合う不可分の関係にあります。ですから、診断と指導を別々に考えるのではなく、「教育的診断に基づく指導」としてセットで考えていくことが大切です。





「子どもをとらえる視点」としては、「子どもの各側面」「生活の各場面」「誕生から現在までの経過」を通して子どもをより深く理解することを目指してきました。

この考え方を引継ぎ、「Ⅰ現在の研究の考え方と進め方」の中で、P4には「支援を考える思考過程」と「子どもをとらえる視点」を、P8からP12には「一資料一子どもをとらえる視点の例」を掲載しています。

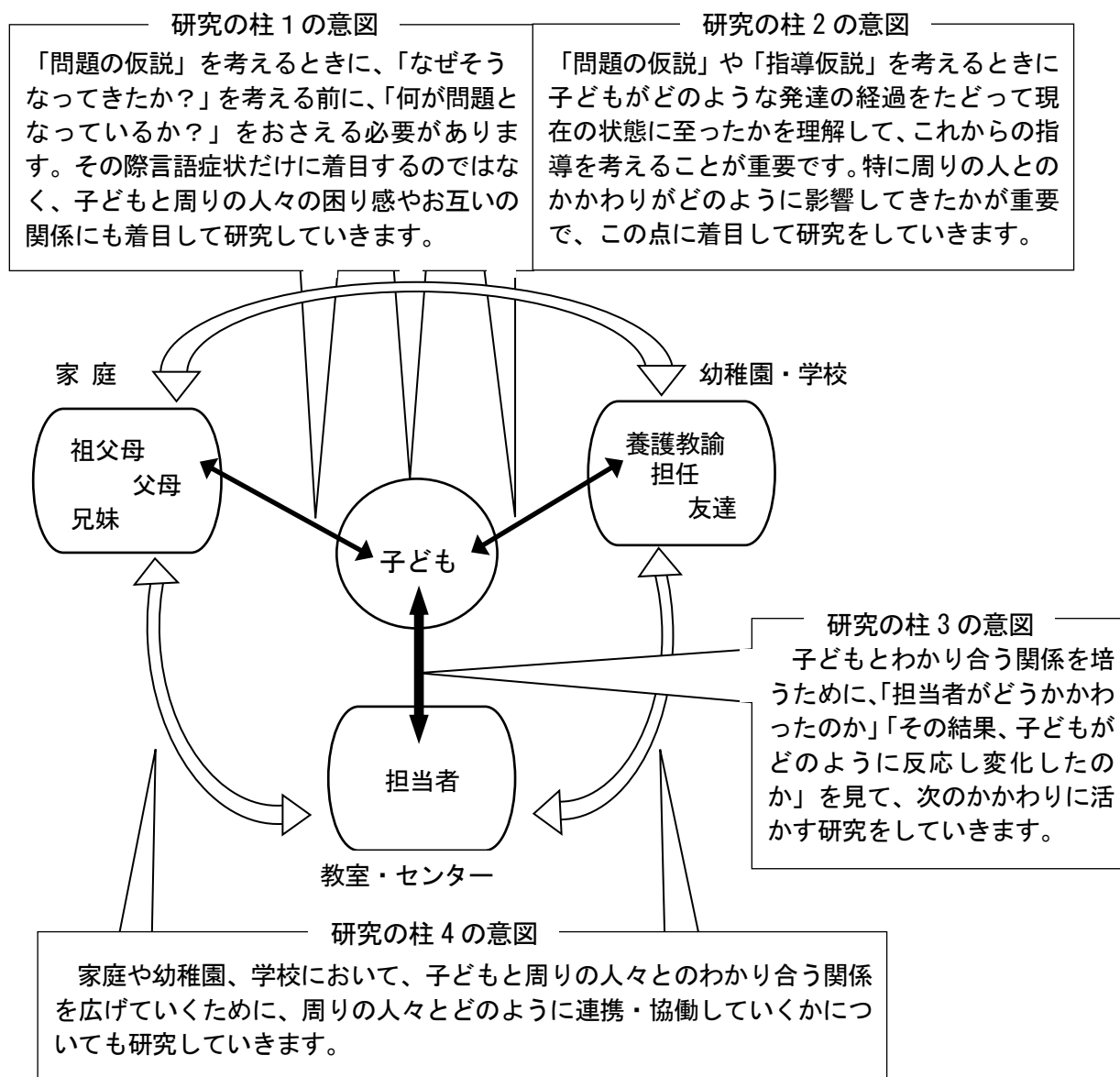
4) 「わかりあいを大切にした支援のあり方」の研究 2004 年～

「教育的診断に基づく指導」の研究は、道言協の基本的な考え方をまとめわかりやすく説明し、会員に根付かせるものとして大きな役割を果たしました。その後、指導の思考過程をより深く研究する段階に入り、「わかりあう」というキーワードをたて、担当者の子どもへの一方的な理解だけでなく、子どもと担当者の相互理解、そして保護者や子どもを取り巻く関係者との連携・協働にまで

研究の視野が広められました。

特に、「問題の仮説」を考えると、「なぜそう
なってきたか？」を考える前に、「何が問題とな
っているか？」をおさえることの重要性に着目する研究を進めてきました。

特殊教育から特別支援教育へ移行した時期でもあり、教育界全体が障害への理解や関心を深め、
他機関との連携・協働がより重要視されるようになりました。



ことばを支える「心の育ち」を
大切にした支援のあり方を考える